

気仙沼高等学校 SGH プログラムのフィールドワークの受入れを行いました(2016/12/17)

テーマ：スーパーグローバルハイスクール，防災教育
場所：東北大学災害科学国際研究所（宮城県仙台市）

12月17日（土）に、宮城県気仙沼高等学校から生徒30名8グループが、当研究所を訪れました。同校は、スーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定校の一つになっています。SGHは、文部科学省の事業で、高等学校等におけるグローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図ることを目的としているものです。気仙沼高校は、「海を素材とするグローバルリテラシー育成～東日本大震災を乗り越える人材をめざして～」というプログラム名で、SGH事業に採択されています。今回は、SGHプログラムで実施されている「地域課題研究」の一環での訪問になります。「地域課題研究」は、同校生徒が3～4名のグループになり、プログラムに関連する任意のテーマについて研究・発表を行うものです。今回の訪問は、東北大学災害科学国際研究所ほか、宮城教育大学や東北工業大学などの大学を訪れ、各グループの専門の研究者に、質問や疑問を出したり、情報収集を行ったりする「フィールドワーク」として実施されたものになります。

当研究所では、川島秀一教授（人間・社会対応研究部門）と佐藤翔輔助教（情報管理・社会連携部門）が、同プログラムのアドバイザーになっています。当日は、下記のグループが訪れ、参加した生徒さんは熱心に質問をして、ノートにメモをとっていました。「地域課題研究」の成果は、1月28日（土）に同校の発表会で報告される予定です。

川島秀一教授担当

- 442 班 気仙沼の地盤は補強工事が必要か。
- 512 班 地震・津波と気仙沼の地形は関係があるのか？
- 513 班 歴代の地震、津波から人々は学び、東日本大震災時にそれを活かし、また後世に伝えていこうと働きかけたか。

佐藤翔輔助教担当

- 521 班 東日本大震災の記録を未来に生かすために後世に伝えることができるか？
- 531 班 地域の防災教育を活発にすることは、東日本大震災の教訓の風化を防げるか。
- 532 班 学生の防災意識の向上を図るにはどうしたらよいか。
- 543 班 5年後の気仙沼の住環境は復旧しているのか。
- 551 班 災害時に気仙沼だけで自立できる町づくりは可能か。



川島秀一教授との面談



佐藤翔輔助教との面談